

The author

蝦沼三十三

Illustration

みさくらなんこつ

朝からずっしり♡

ミルク ポット 2

Missy Signpost "Get Yourself!" is
sneaking up a chocolate secret.
It's growing between the girls...

ふたなり時妹の
ドスケベ露出セズリ◎秋葉原



ぶちばら文庫



「どうかう♥みなさん♥ チンポ喫茶ミルクポットの♥
おためしザーメンをご試飲くださいあああひっ♥」

伊織の声が高らかに響き、姉妹は寄り添ったベニスを互いに擦り合わせた。

固い幹が押し合う。青黒い血管がつぶれあつ。亀頭傘が噛み合つてお互いを刺激する。

姉妹はベッコと腰を揺すり、自分の一番敏感な場所を、相手の一番敏感な場所にぶつける。

二人の興奮が増し、ギョラリーの息も荒くなつてゆく。二人の先端からは先走りの汁が滲み、濡れたパンカチから亀頭の赤黒い色が透けている。

——ああ……幸せだな。

プロローグ	真っ白な雨の中で ……6
第一章	うさぎさんみつけた … 11
第二章	いつでも君を見つめてる… 49
第三章	伊織のスパイク …… 74
第四章	こすりあう姉妹 ……125
第五章	おちんぼ×おちんぼ …165
第六章	センズリ・ブートキャンプ …199
エピローグ	みるくの国のアリス …229



恋する努力のお姉様！

祐希堂 香織

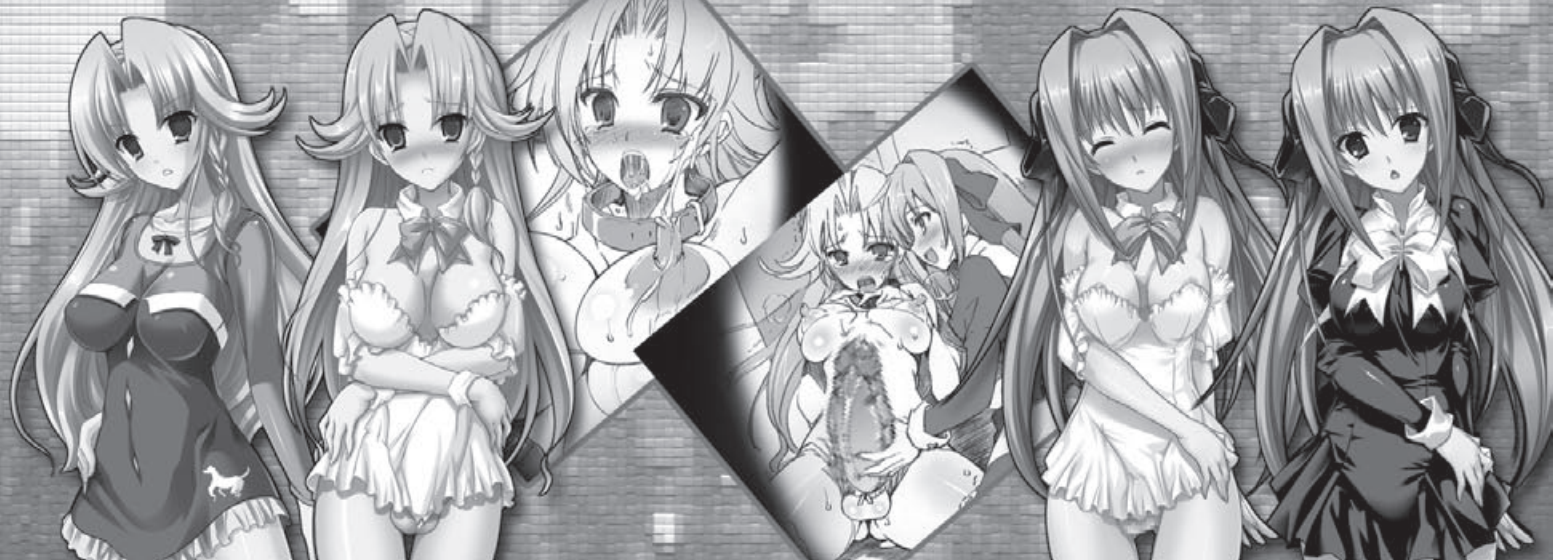
家出中だった祐希堂家の長女。男と暮らしていると噂されていたが、実際に伊織に目撃され、秋葉原で再会することになった。伊織のクラスメイトの岡澤をご主人様と呼び、メイド喫茶をいっしょに開店しようと夢見ていたが、伊織がふたりの関係に介入したことで自分の居場所を追われる。



完璧なるオチンポお嬢様！

祐希堂 伊織

祐希堂家の次女であり、可憐な容姿のお嬢様♥ 大きなチンポを持つフタナリ少女で、射精衝動に突き動かされ、大胆な行動に出ることも。姉の香織が秋葉原で暮らしながら、自分のクラスメイトと関係を持っていたことに驚き、その相手を理想の恋人と思い込み、奪おうとするが…。



プロローグ

『真つ白な雨の中で』

かみさまをつくろう。

みるくさまは、私だけのかみさま。

みるくさまはいつもニコニコしていて、森と水と空の、私だけの世界にミルクの雨を降らせる。

真つ白い雨。

その雨は七日間降り続き、世界は真つ白に覆われてゆく。森も、水も、空も——そして私も、ミルクの海の底に沈む。

世界は、やがて真つ白になる。

けれど、またそこから草が芽を出す。森が生まれ、空が分かれ、また私が生まれる。私は、七日ごとに生まれ変わるのだ。

ここはとてもきれいで、静かな世界。
ここには誰もいない。このみるくさまの領域に入れるのは——。



賞賛の言葉は、その少女にとって、ごくありふれたものだった。

誰よりも利発で、誰よりも愛らしく、しかも名家のお嬢様。そんな祐希堂伊織^{ゆうきどういおり}にとって、賞賛とは空気のようなものだ。そこにあるのがあたりまえで、いちいち気にかけようとも思わない。自分は周囲のみんなよりもずっと優秀な、完全な人間なんだとさえ思っていた。

そんな彼女が、子供の頃、転んで右の脛をすりむいてしまった時のことだ。使用人はあわてて飛んできて、その傷に消毒薬を塗り、絆創膏を貼ってくれた。伊織は転んでも、ずっとがまんしていたけど——。

「うつ……うあああああああ——」

それを見たとき、大声で泣き出してしまった。

脚を引きちぎってしまいたかった。

痛かったから——ではなくて、汚かったから。

真っ白ですべすべだった肌に醜い穴が空いて、しかもそれを不恰好なシールで塞いでいるなんて。こんな気持ち悪いつぎはぎの脚が、自分の体の一部だなんて思えない。自分の体が不完全なものに変化してゆく、そのさまが気持ち悪かった。

だから血と膿が滲むのも構わず、絆創膏を剥がし、何度も指でなぞった。

使用人たちはそのたびに、せつかく更地にした傷痕に、絆創膏を貼ろうとしたり、汚らわしい薬品を塗りつけようとしたり……。何度も剥がしてしまいう伊織を、まるで聞き分けのない子供のように扱い、諫めようとした。

ただ、一人だけ——姉の祐希堂香織^{かおり}だけは違っていた。彼女は伊織の傷痕をぬるま湯で清めた後で、伊織をこっそり母親の部屋に連れてきた。そして化粧台からコンパクトを取り出し――。

「ふふっ……お母様には、しー、だよ」

そういつて、伊織の右膝の下に、そのパフを当ててくれたのだ。

それは二人の母親が、化粧のときに使うファンデーションだった。香織は何度も丁寧にパフを叩き、その傷をきれいに消してしまったのだった。

「ほら、これだよ、伊織がしたかったこと……」

伊織は、首が取れるくらい、何度も大きくうなずいた。

そう、それなの！

お姉ちゃん私のことをわかつてる！

お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ お姉ちゃん！

いつだって、彼女は伊織にやさしくしてくれた。色々なことを教えてくれた。この窮屈な屋敷の中で、彼女は一番の……そしてひよっとしたら唯一の、伊織の理解者だった。

だけど、その姉も今はもういない。一年前、前触れもなく、この屋敷を出て行ってしまったのだ。

——香織様を、街で見かけたのよ。街って言っても……ほら、わかるでしょ？

——香織様……男に溺れたんだわ。

——何の不自由もなく生活できるのに、男にイカれて屋敷を飛び出すなんて……。やっぱお嬢様ってのは、いろいろユルいのかしらねえ。

使用人たちの下世話な噂話が耳に入ってくるたび、伊織の心は暗く沈んだ。

お姉ちゃんはその人じゃない——そう言いたかった。

「行動力のあるお姉ちゃんは、自分でこの籠を壊して飛び立ったんだ……」

伊織は、きつとそうだと信じた。

この屋敷は、伊織を「祐希堂家のご令嬢」という型に詰め込み、伝統の重みで押しつぶそうとする。

その圧迫に、伊織は子供のころからずっと苦しめられてきた。この重みから逃れる術は無い。少しずつ心を歪ませて、祐希堂の家が望む型の通りの大人になるしかないのだと、そう思っていた。

でも、香織は違った。彼女は持ち前の行動力でこの屋敷を飛び出した。祐希堂の形に歪んでゆくよりも、自分の力で、自分らしく生きてゆくことを選んだのだ。

だけど——。

「それならどうして、私もいつしよに連れて行ってくれなかったの……？」



だから、かみさまをつくろう。

みるくさまは、毎日私を抱き、やさしく頭をなでてくれる。

みるくさまの領域には誰も入れない。入れるとしたら、私とお姉ちゃんだけ。

ここは真つ白な世界——。

第一章

『うさぎさんみつけた』

祝福の鐘が高らかに鳴り響く。

ここは、教会。人の生を祝福し、人の死を悼み、そして男女が生涯添い遂げることを誓うの儀式の場。

今日もまた、一人の女が結婚式を迎える。長い子供時代を終え、シルクオーガンジーのドレスでパッケージングされて、愛する人のもとに嫁いでゆくのだ。

だが、その控え室から——。

「やんつ♡んもお……えつちなことしちゃだめ♡ ああん……ん♡」

聞こえてはいけなはずの、いやらしい声。

「あ……だめ……結婚式の当日に……エッチ……だめ……♡ あと一時間で……式が始まっちゃうんだから……んあああ♡♡♡」

そこでは、花嫁と花婿だけの、秘密の儀式が行われていた。

白いドレスに身を包んだ花嫁は、化粧が乱れるのも構わず、涙と涎で顔をどろどろにし

て悶絶していた。

汗ばんだ肌がドレスの薄生地に通け、ひどく扇情的な姿だった。乳首は充血して、高く盛り上がった様が服越しにもはっきり見て取れる。両脚は大きく開き、乱れたドレスの裾から肉付きのいい太股が覗いている。

そんな花嫁の愛らしい姿を見ながら、男は優しく彼女のペニス、ペニスを掴んだ。

「あつとおおおおお……♡」

女の子の一番敏感な部分を乱暴に弄られて、花嫁は一際高く喘いだ。

「やあ……だめ……そこ……なでなでしたらあ……♡ ふくらんじやう♡ ぶつくりしちゃうの♡」

だが男は、そんな懇願など聞き入れず、さらに強く彼女のペニスを擦ってゆく。

「だめだよ……♡ 女の子として一番大事な日に……♡ そこを触ったら、またダメになっちゃう♡ なっちゃうううう♡♡」

くちゅっ……くちゅっ……汗とカウパー汁を巻き込み、濡れた音を立てながら、男の手の動きはさらに早まってゆく。

「おちんちん……♡ 女の子なのに生えちゃってる、伊織のいやらしいおちんちん……♡ ウェディングドレスの中でおつきくなっちゃうよお♡♡♡」

いつしか彼女のその場所は、シャンパンボトル並みのサイズに膨らんでいた。

祐希堂伊織——それが今日、佳き日を迎えた花嫁の名だ。

祐希堂、という名前に聞き覚えのある人も少なくないだろう。そう、戦前から続く名家の、あの「祐希堂」家だ。美しく、賢く、氣立てもよく、家柄は超一級品——そんな彼女を射止めた幸運な男が、彼女の先端に優しく口付けをする。

「うああああ♡ 濃厚きっす♡ 熱いペーゼがぶちゅーって♡ 飲み込まれちゃう♡ ぶちゅー♡ ペろペろ♡ れろおおっ……っ♡」

男の唇が伊織の亀頭を包み、激しく吸い上げた。

ずどぞどぞどぞど……とロマンチックな音がして、亀頭粘膜が強く吸引される。力強くフェラチオをするその姿を眺めながら、伊織は改めて幸せを噛み締めた。

子供の頃、親友だと思っていた相手に、このペニスを見せたことがある。

そのときに、わかった。人々の、このペニスに対する敬意のなさ。女である伊織にそれがついていると知ったときの露骨な嫌悪感。あの女は——「普通じゃない」。

でも、彼は違う。

このペニスが付いた身体に欲情してくれて……興奮して……勃起して……愛してくれたい男性。そんな人だから、伊織は彼を、生涯の伴侶に選んだのだ。

「あつ……あつ……♡ 吸われてる♡ 大好きな人にちゅーちゅーされて、女の幸せを感じる♡」

じゅぽっ……じゅぽぽぽぽぽっ！

ぽぢゅぢゅううじゅろろろおおっ！

伊織の股間から響く激しい吸引音。男性にしかできない力任せの荒々しいフェラチオが、伊織の心を溶かしてゆく。

「ああああああっ……チンポお……吸われてるう♥ 愛するご主人様に、ちゅーちゅーって♥ んんんんああっ……オスフェラされてチンポ感じるう♥ キンタマきゅんきゅんしちゃうっ♥」

伊織の口から、禁断の言葉が飛び出した。

「チンポ」の三文字は、伊織の狂わせる最高の媚薬だ。それを口にするだけで舌が溶け、喉が潤み、脳が痺れ、全身が快感に包まれる。

「ち、ん……………ぽ……………♥ ちんぽ……………♥ ああんっ♥ あああっ♥ ちんぽ、



伊織は狂ったように、心を蕩けさせる魔法の三文字を繰り返した。

「んおっ♡
んおおおっ♡
おおおおんっ♡
おんっ♡
おひんっ♡
うああおん♡

精巣が疼く。

会陰がひくひくと痙攣する。

「ちんぽがつ♡ ひんぽがひもひいろいろおつち

「ちんぽがつ♡ ひんぽがひもひいろいろおとお♡ ぬけひやう♡ ちんぽずっぽしぬけ
ひやうのおおつ♡ いおりもうだめつ♡ いくつ♡ いぐっついぐつ♡ ちんぽおくちでござ
しごしされていぐうううつ♡ みるく♡ みるくでるつ♡ ちんぽにいつぱいたまてた
ミルクつ♡ 精液つ♡ ぜんぶ発射しちゃうよお♡ んあああつ♡ ぐあああああああ
っ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああ♡ んっ♡ んおおおおつちんぽっおおつ♡ みるくうう
うう♡ ちんぽっ♡ いっぱいおとおおつ♡ あおっついぐっ♡ いぐいぐいぎますううう

つ♡ちんぽいぐううっ♡ おおっみるくみるくっ おおおおっ……おっ……おほおおおお
 おおおおおおおおうおおおうおおおおっ♡♡♡♡♡」

ぶしゅつ、びゆるつ、どびゅうるるるるるるるるるるるるるるる！

マヨネーズの容器を力いっぱい押しつぶしたような音がして、伊織のペニスから大量の精液が撒き散らされた。

放たれたミルクは宙を舞い、壁を汚し、天井を叩き、床に水溜りを作る。

それでも、射精は止まらない。伊織のペニスからは際限なくミルクが噴出し、世界を白く染めてゆく。

白く……白く……。

暖かな雨がすべてを覆い尽くすまで――。



頭の中を覆っていた白い霧が晴れ、伊織の心によりやく冷静さが戻った。

半畳ほどの小さな個室に、ツンと鼻を刺す刺激臭が立ち込めている。目の前にある洋式便器は、伊織自身が放った粘りけのあるミルクで白くデコレーションされていた。

口の中からショーツを取り出して、ふうう……とため息をひとつ。淫声を押し殺すため

に詰め込んでいたちっぽけな布切れは、涎でべとべとになっていた。

おそるおそる両手を見回してみる。太幹を握っていた右手は先走りの透明な汁で、亀頭に被せていた左手は白濁したミルクで、どちらもどろどろに汚れていた。

「ふふっ……たくさん出ちゃったあ♥ 伊織ちゃんてばいやらしつ子なんだからあ♥」

絶頂直後の濁った瞳で自らの手のひらを眺め、液塊をじゅるりと吸い上げる。液体というよりもゼリーに近い濃厚な精液が、口腔内で、ぶちゅり、と弾けた。

舌先を愛撫するミルクの甘味。

頬粘膜を覆うとろりとした触感。

鼻腔へと抜けて行く刺激的な香り。

その全てが伊織の心を溶かし、甘美な陶酔へと誘う。じゅるっ……びちゃ、ちゅるるるっ……伊織は繰り返して自分の手のひらに唇を寄せ、恋人のペニスに奉仕するかのような丹念さで、指の一本一本を舌で清めていった。はしたない音を立てながら、指先を咥え、手のひらを吸り、爪と指の間に溜まった精液まで穿り返す。そんなことを幾度か繰り返して、自分の手指を汚していた白濁汁を最後の一滴まで舐め取ってしまう。

「んっ♥ おいひい……♥ ああ、もったいない、もうなくなっちゃった」

残念そうに言いながら、伊織は冷たいタイル壁に背中を預けた。

ちらりと、自分の下半身に視線を送ってみる。

彼女のその部分には、大きな肉のホースがだらりと垂れ下がっていた。

周囲の肌よりも若干色の濃いその肉塊は、伊織自身の肉体から生えている、まぎれもない彼女の一部分だった。

射精直後で幾分小さくなつてはいるものの、それでもまだ、乳児の腕ぐらいはあるだろう。スカートの下に隠れる大きさになるまでは、まだしばらく時間がかかりそうだった。

「ああ……体中べとべと。困ったな……」

半ば呆けたような声で言いながら、伊織は、壁に取り付けてあったトイレトーパーをくるくると巻き取っていった。

噴き出した精液は伊織の両手だけでは納まらず、彼女の内腿のあたりまでべったりとこびりついていた。赤黒い亀頭の先端からは、涎のようにミルクの残滓が溢れ、床にまで伝っている。

その全てを紙で拭い、便器の中に放り込む。最後にアルコールティッシュで指先を拭いて、消臭スプレーを噴き付けると、伊織の身体から生々しいミルクのにおいが消え去っていった。

身づくろいを終えてトイレを出ると、ちょうどOL風の女性が洗面室に入ってくるところだった。

伊織は静かに目を伏せ、その女性の隣を足早に通り過ぎた。

——私の秘密、ばれてないよね……。

軽く不安に駆られながら、スカート越しに、小指で下腹のあたりを引っ搔いてみる。大丈夫、もう勃起は収まっている。この状態ならば、裸にでもならないかぎり、身体の秘密を人に知られることはないだろう。

伊織のその部分には、女性にはあるはずのない、もう一つの性器がついている。

普段は女物の下着の中にきれいに納まるけれど、一度漲みなぎったが最後、全身の血を集めて巨大に膨れ上がる遅しすぎる肉の竿。

これのせいで伊織は、ずっと孤独に生きてきたのだ。これではまるで、両脚の間に爆弾を抱えているようなものだ。彼女がどんなに普通の生活を望んでも、肉体の秘密を知られてしまえば、平穩な日常なんてたちまち吹き飛んでしまうのだから。

——うん、大丈夫。気付かれてない。ばれちゃったら大変なもの。だって、もしこんな街中で、私がオチンポついているふたなりっ娘だつてばれちゃったとしたら……。

「くひひひっ♡」

桜色の唇から、押さえた笑いが漏れた。

誰にも聞こえないか細い声——だがそれは、まぎれもなく喜びの声だった。そう、これが伊織のもう一つの秘密。

——ばれちゃったら大変……きつと大騒ぎになっちゃう♡ みなさん、女の子トイレにオカマが忍び込んでますよーって♡ デカチンポ生やしてた変態が女子便所でおセENZリぶっこいてましたよーって♡ ごめんなさいっ♡ お外でもがまんできなくてコキコキしちゃう変態ちゃんでごめんなしやいっ♡ でもオカマじゃないですっ♡ 伊織は……伊織は……オカマじゃなくて、チンポコいじるのがだいしゅきなふたなりおにやのこのなおおおおおおおおおおおっ♡

淫らな言葉を叫びながら、スカートをめくり上げて床にへたりこむ自分。

その周りにはにわかに人垣ができ、突然始まったふたなり女のオナニショーを見物し始める。軽蔑の言葉、好色そうな視線、熱く湿った息遣い——観客は思い思いに、自らの欲望を伊織にぶつけてくる。その全てを受け止めながら、伊織はペニスを扱き上げて気が遠くなるほどの快感に埋め尽くされてゆく——。

「……あっ？」

伊織は、ふと足を止めた。いけない。せっかく鎮しずめたばかりのペニスが、また膨らみ始めている。

男性器が付いているだけならば、彼女もまだそれなりに、普通の生活を送ることができたのかもしれない。だがこのペニスは、ふとした弾みで、彼女を異常なまでの発情状態に陥れる。その巨大すぎる快楽は瞬く間に伊織から理性を奪い、彼女を肉欲を満たすこと以

外、何も考えられない自慰人形に変えてしまうのだ。

「ああ……もう。今、出したばかりなのに……」

大丈夫。まだ間に合う。伊織は立ち止まり、深く深呼吸しながら心を落ち着ける。このまま肉欲に心を没われてしまうわけにはいかない。こんなところでオナニーを始めてしまうわけには。

「だって……もつたいたいもんっ♡ もつと、もーつとたくさんおちんぼミルク溜めて、たくさんドピュドピュするの♡ くふふっ……すぐ出したいけど、まだだあめ♡ 次のオナスポまでガマンするの♡ 伊織ちゃんのちんちんはいいちんちんだから、ちゃーんと次のザーメン便所まで、ガマンできましょーねー♡」

あやすような口調言いながら、伊織はスカート越しに亀頭のあたりを軽く撫でた。

敏感な粘膜が布地と擦れて、じんわりした快感が帰ってくる。ペニスの先から会陰のあたりへ、さらに腰骨に伝わり、脊椎を駆け上がって頭の芯まで……。甘い快感を全身で味わいながら、伊織はよたよたと歩みを進めた。



まだ真新しい駅ビルを出ると、目の前にごみごみした街並みが現れた。

ここは出来の悪いパッチワークのような街だ。無機質なビジネス街と、小奇麗なファッションビル、観光客目当ての安っぽい土産物屋、柄の悪い露店街を建物の中に押し込んだみたいなごみごみした雑居ビル……まったく雰囲気の違いエリアが、さして広くもない街中にひしめくように配置されている。

——汚い街……。

心の中で呟きながら、伊織はその無秩序な街並みに足を踏み出した。

原色の看板。ずさまじい密度で商品が詰め込まれたショーケース。太股がむき出しのミニスカート姿で男性客を呼び止めるウェイтрレスたち。店先に張られたポスターの中では、素肌リボン巻いただけの幼い少女が、無邪気な笑顔を浮かべている。

街中のどこを見ても、物欲や性欲を直接刺激するものが溢れかえっている。わずか一枚のオブラートを被せることすら厭い、むき出しの欲望をさらけ出した街——それが秋葉原だ。

初めてこの街を訪れたとき、伊織はあまりに淀んだ雰囲気当てられて、へたりこみそうになった。

だがそれでも、伊織はこの街から離れられなかった。

道を歩く人間たちから発せられる猥雑なオーラ。

店の奥から道路にまで流れ出してくる淀んだムード。

ぶちばら文庫

朝からずっしり ミルクポット2^{リットル}

2011年 7月29日 初版第1刷 発行

■著 者 蝦沼ミナミ
■イラスト みさくらなんこつ
■原 作 ハースニール

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©MINAMI EBINUMA ©HarthNir

Printed in Japan 2011

PP020

朝からすっぴん
ミルカポッド

Milky Paradise Vol. 1 (Milkpod) is
presented as a personal record
of the growing relationship between the girls.

好評発売中

ふたなり美少女のハレンチに
ぴゅぴゅ

章ごとに移り変わる、
パラレル・イラスト!



豪華ゲスト作家: あらいぐま・三色網戸・蜜キング

ぶちばら文庫09
蝦沼ミナミ 著
みさくらなんこつ、他 画
ハースニール 原作
定価 670円 (税別)

妄想暴走!! お嬢様・伊織ちゃんの過激な日常
みさくらなんこつワールド全開!

好評発売中

ぶちばら文庫18

夜空野ねこ 著

とろろ 画

Parthenon ZERO 原作

定価 670円(税込)

ファルナ

紅蓮の
守護天使

～淫獣の刻印～

挑むたびに、
負けちゃうぞ…
気持ちいい…の

ぶちばら文庫17

沖田和彦 著

熊虎たつみ 画

Parthenon 原作

定価 670円(税込)

珊瑚ちゃんはある伝説の十二天使の
生まれ変わりなんですっ!!

妹の誕生日に現れた天使コエルは、そう
言って珊瑚を天界へ連れて行こうとした。
唯一の家族を失うわけにもいかず、護は
謎の神父の言葉を信じることにする。そ
れは、珊瑚のお腹に新しい命を宿せば、連
れ去られずにすむというもので…。



妹天使は、
赤ちゃん作らないと昇天しちゃうよ!

妹天使は、
赤ちゃん作らないと昇天しちゃうよ!



妹天使の赤ちゃん

描き下ろしカットも
新たに収録!

好評発売中

ぷちぱら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方へのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。